

高橋英夫編「志賀直哉随筆集」岩波文庫、岩波書店 1995年10月16日刊を読む

1. 蜻蛉

- (1) 暑い。今年の暑さは不自然にさえ思われる。庭の紫陽花が木一杯に豊かにつけた美しい花をさも重そうに垂れている。八つ手は葉の指を一つ一つ上につぼめて出来るだけ烈しい太陽の熱を受けまいとしている。また八つ手の根本に植えられた鬼百合は真逆、これほどの暑さが来ようとは思わなかったろう、ひよろひよろと四、五尺も延びて、今はそれを後悔している。茎は蕾の重みに堪えられず、蕾の尖った先を陽炎の立ち昇る乾いた地面へつけて凝っとしている。それは死にかかった鳥のようにみえた。
- (2) 麦藁蜻蛉が来た。蜻蛉はカンカンに照りつけられた苔も何も着いていない飛石へとまった。そして少時するとその暑さの中に満足らしく羽根を下げた。
- (3) 自分は1ト月程前、庭先の濠で蜻蛉の幼虫だろうと思う醜い虫が不器用に水の中に潜って行く姿を見た。あの虫がからを脱けてこうして空中を飛んで来たのだと思った。この暑さにもめげない蜻蛉の幸福が察せられた。蜻蛉は秋までの長くもない命を少しもあせらずに凝っとして暑さを楽しんでいる。およそ十分もそうしていた。其処に今度は塩辛蜻蛉が飛んで来た。その黒い影が地面をたて横に走った。すると今まで凝っとして羽根をへの字なりにしていた麦藁蜻蛉が眼ばかりといていい頭をクリクリと動かした。と思うと急に軽い速さを以て塩辛蜻蛉を眼がけて飛び立った。塩辛蜻蛉は逃げる間がなかった。空中で羽根と羽根の擦れ合う乾いたような音がして、ちょっと一緒に落ちかかった。が、直くと二足はもう一つになっていた。悠々と高く飛んで行く。その方にもくもくとしたまぶしい夏の雲があった。蜻蛉は淡い点になって暫く見えていた。

(1917年) P16～17

2. ナイルの水の一滴

人間が出来て、何千万年になるか知らないが、その間に数えきれない人間が生れ、生き、死んで行った。私もその一人として生れ、今生きているのだが、例えていえば悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも前にもこの私だけで、何万年 遡っても私はいず、何万年経っても再び生れては来ないのだ。しかもなおその私は依然として大河の水の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。

(1969年) P360

<コメント>

- (1) 志賀直哉(1883～1971)が34歳、86歳の時に書いたエッセー。実に新鮮だ。
- (2) 志賀直哉には国語の教科書に載っていた「小僧の神様」で親しみを覚え、岩波文庫で同名の短編編集を読み終えた後、確か高校2年生の夏休みに長編小説の「暗夜行路」を岩波文庫の2巻本で読んだ。
- (3) 高校1年生の夏休みの読書としては、国語の教科書で夏目漱石の「坊っちゃん」に親しみを覚えたことをきっかけに、「坊っちゃん」の全文を岩波文庫で読み、続けて「三四郎」、「それから」、「門」、「こころ」を岩波文庫で読んだ。

(4)中学生のころから高校に入ったら夏休みには読書と決めていたので、他の高校生のように2学期の予習の勉強が進まず、後々困ったことになった。これもまた人生かも。

— 2016年8月18日(木) 林 明夫記—